

パネルディスカッション

心理専門職が活用される社会へ —医療領域から—

神戸学院大学心理学部 三和 千徳

心理専門職にはこれまで汎用資格として臨床心理士があり、公認心理師は同じ汎用資格としてその職域を引き継ぐことになる。現在、臨床心理士の働く場所は病院や診療所などの医療領域が最も多く、公認心理師が誕生すれば医療領域との関係はさらに増すだろう。

医療領域の現状として、厚生労働省は入院医療中心から地域医療中心へ政策転換を進め、地域での多職種協働のチーム医療を採用する方針を明確に打ち出した。また、近年、医療の対象は拡大を続け、精神科医療においても例外ではない。従来、精神科医療は統合失調症や双極性障害などの精神疾患を医療の対象とし、薬物療法を中心とした精神科病院での入院治療が主軸であった。しかし、近年、それまで医療の対象ではなかった問題、例えば物質だけでなく行動の嗜癖、うつ病と診断するほど重篤ではない適応障害、生来の特性である発達障害などにも対象が拡大している。これらの治療に薬物療法は本質的な解決ではなく、心理社会的アプローチが重要であり、心理職も含む多職種協働のチーム医療が求められる。

公認心理師がチーム医療で活躍できる分野として、自殺予防、がん患者・緩和ケア、糖尿病・透析患者、臓器移植、認知症や高次脳機能障害などがあり、その家族など周囲も含めたケアが期待されている。その中でもがん患者・緩和ケアの分野は多職種協働のチーム医療として先駆け的な分野で、すでに心理職がチームの一員として活躍している。現在、がん患者・緩和ケアの分野で心理職が果たしている役割や課題は、今後、公認心理師がチーム医療に貢献する際の重要な視点を含んでいる。

がん患者は、身体的な苦痛のみならず、生死に直結する難しい意思決定や経済的苦悩など強いストレス状況下にあり、パーソナリティやそれまでの人生の経緯が反映したさまざまな精神症状を経験する。心理職は、このような多彩で複雑な精神症状を心理学的に評価、対応する役割を果たしており、その家族や医療スタッフを含めた心理的援助も期待されている。

しかし、チーム医療における心理職には、治療構造のあいまいさ、役割の不明確さ、コミュニケーションや情報共有の少なさ、医学的知識の乏しさといった課題が指摘されている。もともと心理職は心理療法を個別に行い、多職種協働においてその専門性を生かすための教育を十分受けてきたとも言えない。今後、公認心理師がチーム医療で活躍していくための共通の課題として、これらを解決していく必要がある。